

ヴィクトリア朝世紀末の性と政

——『緋色の習作』における秘密結社、
クラブ・ランドについて——

Sex and Politics in the Victorian *fin de siècle*:

Secret societies and club land in Conan Doyle's *A Study in Scarlet*

榎 本 洋

Among several detective novels, *A Study in Scarlet* still stands out as the most memorable piece of work for its initial introduction of Sherlock Holmes to a general readership. With a scientific and intellectual background of the day, Holmes emerges as a representative figure of rationalism and empiricism in Victorian bourgeois society. Holmes' analytical method of crime-solving are divided into two categories and often illustrated as an articulation or outgrowth of so-called *Zeitgeist* in a scientific innovation. However, the work shows another example of set of values in Victorian ages. Obviously, several pages of the story as well as other Holmes stories, are filled with frequent references to secret societies and club worlds. In a sense, the whole canon of Sherlock Holmes' stories can be termed as the literary output of secret societies and club land. The former group contains Christian church of Mormon sect in the U.S and the latter several inscrutable societies of political nature coming from the Continent. The Mormon sect of evangelical society tells us a lot about contemporary's fear of sexual licentiousness. And secret societies of political nature have all the time acted behind the scene and tried to keep people under a sever control. Contemporary people fear that those who destroy law and order through their devastating agency make it impossible for the established society to be what it ought to be. Secret institution's presences also provide an ideal outlet of Victorian anxieties against surge of outside forces, especially from Germany. At this age, the rise of German empire conducted by Otto von Bismarck looms up as devastating forces in British people's minds. Against these dominant pressures which threaten and make fragile the British empire, the

comradeship of Holmes and Watson works as a stronghold of an imperial glory and achievement. Furthermore, the club land of Holmes and Watson is created through Doyle's tenacious and constant struggle to erase his identity as an Irish man, which seems quite inconvenient for his entrance into an established society in England. In short, Doyle's overcome over his Oedipus Complex entails the innovative creation of Holmes and Watson, who exorcise evil spirits of outside pressures from British soil and sanctify British empire.

1 序論

『緋色の習作』(原題 *A Study in Scarlet*。以下は『習作』と記す)は1887年に *Beeton's Christmas Annual* に発表された、言わずと知れたホームズ物の第1作目である。以降、ドイルは1927年まで、ほぼ40年にわたり4編の長編小説と56編の短編小説を書き続けることになる。ここでは、事件そのものを一つの因果関係の鎖の連鎖と見なし、原因から事件の結果を予測する「前倒し推理」、事件の結果から原因を見る「巻き戻し推理」などホームズの推理方法が語られる。しかし、もう一つ見逃せないことがある。それは、このテキストが秘密結社、政治結社などの非合法的な権力組織の存在を意識させることであり、また、それへの言及に事欠かない事である。ホームズがヴィクトリア朝の時代精神を象徴しているなら、秘密結社やクラブも同様に時代のなにがしかの気分を代弁しているように思われる。

『習作』では閉鎖的なモルモン教団とロンドンの裏社会で暗躍する秘密結社の存在が示唆される。殺人現場に残された血文字の“Rache” (33) がドイツ語の「復讐」を意味し、それを犯人のジェファーソン・ホープ (Jefferson Hope) が真似たことが語られる: “I remembered a German being found in New York with RACHE written up above him, and it was argued at the time in the newspapers that the secret societies must have done it...” (119). この事件はドイルの創作だったのか、残念ながら歴史的な裏付けは得られず、委細を極めるペンギン、ワールズ・クラシックスにも注釈されてない。とはいえ、別の箇所では作者ドイルは秘密結社の名前を、幾分、安易に列挙してみせる。ドレッパー殺人後の『デیلی・メール』紙 (*Daily Mail*) の社説では、“Vehmgericht, aqua tofana, Carbonari, the Marchioness de Brinvilliers” (50) などドイツ、イタリア、フランスなどの秘密結社が挙げられ、外国人への監視を強化するように提案している。

しかし、これは何も『習作』に限ったことではない。ホームズ物の聖典全般にわたって該当する。社会主義、アナキストへの恐怖は“The Six Napoleons”で口にされ、“The Five Orange Pips”ではクー・クラックス・クランが登場する。“The Naval Treaty”、“Bruce-Partington Plans”では国家機密を狙うスパイが、“Wisteria Lodge”では亡命独裁者の命を狙う反政府主義者たちが、そして市民生活を脅かすアメリカ西部の結社を描く『恐怖の谷』(*The Valley of Fear*, 1915)でも主人公の死を巡って秘密結社がささやかれる。また、主人公の赤毛が目されるが、あの喜劇的な“The Red Headed-League”でさえ、発端となるのは謎めいた団体である。そして何よりもホームズが生涯を賭して戦うモリアーティ (Moriarty) 教授の謎の犯罪組織とその企み。ホームズとその兄マイクロフト (Mycroft)、ワトソンは彼らの陰謀を阻むと、行きつけのディオゲネス・クラブ (Diogenes Club) で事件の解決を祝う。こう見ると『習作』を皮切りとする60篇のホームズ物は、市民社会に認知された、親睦を目的とする社交クラブから、得体のしれない地下組織 (秘密結社)、政治結社まで、万遍なく網羅していることに気づく。さながら、(秘密) 結社文学、クラブ文学と見ても差し支えないくらいだ。

ところで、ヴァイマー (Christopher B. Weimer) は数少ない『習作』論で、ホームズの謎解きが中心となる物語の外郭と、スタンガソン (Stangerson)、ドレッパー (Drebber) 等のモルモン教徒らの確執を巡る物語の核心部の人物配置、場面などに、類縁性、パラレリズムの関係を読み解いている。ともすれば分裂気味な印象を与えるテキストに統一感と安定性を見出し、ドイルの作家としての良心と力量を見つけようとするのが意図である。今さら統一性を云々するのは、問題意識としてかなり古風だが、大切なのはヴァイマーの次の指摘である：“Before concluding, I would like to offer some subversive speculations on how the inner text of *Study* might expand our ideological perspective on the outer” (Weimar, 207). この“our ideological perspective”が、1部6章で挙げられている排外主義・排斥主義であり、“a closer watch over foreigners in England” (50) を『デイリー・メール』紙が訴えている通りである。ヴァイマーの論考は、こうした“the streaks of Xenophobia and totalitarianism”が2つのプロットに重くのしかかっている事を論じている。結社 (政治結社、秘密結社、社交クラブなど) の多くはもともと排他的な、特定のメンバーに限られたものとはいえ、なぜいとも

容易く外国人の排外主義へと傾くのか。ヴィクトリア朝ではクラブ、結社が華やかに隆盛を極めており、文学でもディッケンズ (*The Posthumous Paper of the Pickwick Club*) やコンラッド、チェスタトンなどもそうしたクラブ・結社を抜きには語れないと思われる。¹⁾

この論文では、『習作』においてこうした結社、団体が一体、何を意味するのか、その意味的、象徴的役割を、時代の背景を垣間見ながら考察する予定である。中心となるのはキリスト教の団体とアナキスト、無政府主義者たちの政治結社である。しかし、これらの象徴性は一般レヴェル、公的レヴェルにのみとどまるものではない事に注意すべきだろう。それだけなら、論じるまでもないだろう。いや、むしろ、公的レヴェルの次元でこれらの意味付けが強烈に意識されるのは、作者ドイルにおいて可能になったのである。ナショナリズム (イングリッシュネスでもよい) という観念的、もしくは公的な想像力が、ドイルという個人的レヴェルにおいて強烈に意識されるとき、ドイルは何をどう描いたのだろうか。ドイルがホームズの物語を書くという行為は、ドイルの私的な領域での清算を伴って初めて可能になったのであり、それによりテキストも公的な想像力を獲得できたのである。

それでは手始めに、二部に登場するモルモン教団の在り方から検討する。

2 モルモン教団のイメージ

モルモン教の名前の由来は末日聖徒キリスト教会 (the Church of Jesus Christ of Latter-Day Saints) より由来し、1830年にニュー・ヨークでジョン・スミス (John Smith) と6人の支持者たちにより設立された。教義的には福音主義の拡大であり、アメリカ大陸における新エルサレムの設立を唱えていた。一夫多妻など、過激な思想故になかなか支持されず、絶えず迫害の対象となっていた (Bates, 679–81)。1840年にイリノイ州に都市を建設するものの、スミスが監禁中に殺され、首領を失った教団はヤング・ブリングラム (Young Brigham) のもとに結集する。ユタへの移住が始まったのは1847年で、テキストの冒頭と年代的に一致する。主要人物の一人であるジョン・フェリア (John Ferrier) と5歳の娘 (後のルーシー) の導入はこうなっている: “Looking down on this very scene, there stood upon the fourth of May, eighteen hundred and forty-seven, a solitary traveller” (72)。この1847年

という日付はモルモン教徒の西征が始まった年ばかりか、アイルランド大飢饉の年でもある。『習作』のペンギン版の注釈者エド・グリナート (Ed Glinert) は“Chosen by Conan Doyle, presumably, as this was the year of the Irish Famine” (141) と記し、ドイルの恣意的な日付の選択を示唆している。つまり、フェリアのアイリッシュネス (Irishness) だが、この異人性は、モルモン教団に加わると跡形もなく雲散霧消してしまう。フェリアは教団の中では周縁的な立場に身を置いているが、アイルランド性の消失については重大な問題を孕んおり、ここではひとまず問題提起にとどめておく。

モルモン教団は7月にユタのソールト・レイクに到着し、イリノイでの計画に基づきコミュニティーの建設に勤しむ。こうして辿り着いた“the promised land” (81) がたとえ不毛の地であろうとも、不屈の精神で開拓地の開墾に没頭する。

This is not the place to commemorate the trials and privations endured by the immigrant Mormons before they came to their final haven. ... they had struggled on with a constancy almost unparalleled in history. The savage man, and the savage beast, hunger, thirst, fatigue, and disease—every impediment which Nature could place in the way—had all been overcome with Anglo-Saxon tenacity. (81)

ブリンガム・ヤングの指示通り都市の図面が書かれ、あちこちで街の建設が始まると街路や広場が“as if by magic” (81) のように出現する。また郊外には灌漑施設、生垣が植えられ、町の中心の“the great temple” (81) は日増しにその威容を増していた。フェリアは“the four principal Elders”、四人の長老に次ぐ土地を与えられ、厚遇を受ける。“a man of a practical turn of mind, keen in his dealings and skilful with his hands” (82) と実際の性向の持ち主だったフェリアは12年の内にソールト・レイク市の中でも指折りの富豪にのし上がる。こうして、モルモン教徒とフェリアはアメリカ大陸を西へと横断し、開拓者として最大限のフロンティア精神を発揮する。阿部行蔵は、アメリカのキリスト教が東部海岸の限定的な宗教であることをやめたときから、西へ西へと拡大するフロンティア精神の膨張とともに、大きな転換点を迎えたと『アメリカ宗教読本』の中で指摘する。少し長いが、該当箇所を引用する。「フロンティア (辺境) とは国境を意味しない。そ

れは開拓地の西漸運動の最前線を意味し、文明社会と未開地の接触線に他ならぬ。従って、決して固定した一本の線ではなく、絶えず未開の荒野を前方に眺めながら幌馬車とともに前進してやまぬ動的な一線である。……この特殊な環境と生活とが、如何に大いなる影響をアメリカの文化に与えた事であろうか、殊にフロンティア精神が一定の思想ではなく、寧ろ茫漠とした気分とも言うことが出来るが故に、殊にこの感を深くするのである。……ピューリタニズムに始まり更にユニテリアン自由神学のうちに継承された、疲れることなく行動することを愛するアメリカの精神はここに現実的な試練に耐える機会を得たのである」(阿部、20)。阿部は更にアメリカのキリスト教が置かれた状況が、その信仰、伝統、教義にはなほだ主観的な様相を与えたと続ける。さしずめ、今の流行の言葉を使えば反知性主義的な様相であり、体系的な知よりも、体験的な知を好む風潮を挙げている：「荒野を絶えず漂泊する開拓者達の生活は、伝統を無価値にすることと、伝統から人間を解放することを学んだ。……一つの宗教を支える教義、信条、慣習等の外的伝統は、荒野の生活には寧ろ無用である。彼等を内より揺り動かす主観的な体験の宗教こそ彼等にとって有用なキリスト教に他ならぬ」(阿部、21)。まさしく阿部が指摘する通り、モルモン教徒のイメージは勤勉で、粘り強く、力強いものである。“Anglo-Saxon tenacity”(81)という言葉で形容される教団のこの有り様は、積極的なものである。男性性(masculinity, manhood)を連想させるこのイメージは、宗教家というより開拓者、もしくは労働者を髣髴とさせるものである。知的、精神性をよりも、主観的、肉体的な側面の強調をうかがわすモルモン教団や教徒の在り方は、当然、ホームズとは対照的である。阿部の言葉を借りれば、ここではキリスト教は「主観的な体験」であり、瀰漫し、「茫漠とした気分」なのである。しかし、この箇所から受ける印象は概して好意的なものであり、それは同時代のディケンズにも受け継がれている。

ディケンズは1863年6月にアマゾン号という移民船を取材している。記事は“Bound for the Great Salt Lake”という題で『オール・ジ・イヤ・ラウンド』紙(*All the Year Round*)の1863年7月4日号に掲載され、後に『非商の旅人』(*The Uncommercial Traveller*, 1861)に収録される。取材は6月に行われた。移民船に乗り込んだディケンズは船室を通り抜け、甲板に出て“the emigrants on the deck below”(Dickens, 252)を眺めていると、船長が話しかけてくる。船長が言うには、移民船にはイギリス各地から、ウェー

ルズ、スコットランドなどから集まってきた人々は、乗船後、自分たちで自警団を作り、規律正しく、整然と行動していると、賞賛交じりにディケンズに説明する：“Yet they had not been a couple of hours on board, when they established their own police, made their own regulations, and set their own watches at all the hatchways. Before nine o’clock, the ship was as orderly and as quiet as a man-of-war.” (Dickens, 252). 移民の多くは、出航がじきに迫ったのか、家族、親族宛てに手紙を夢中になって書いている。その数はおよそ800名に上る。ディケンズは移民の仲介人を紹介され、話を聞く。彼によれば、ニュー・ヨークで船を降りると、汽車でセント・ルイスにすぐに向かい、ミズリー川沿いの地まで大平原まで行く。そこから入植地からのお迎えの者と合流し、ソールト・レイクまで1,200マイルもの旅を続けると言う。次に、今度はソールズベリーから歩いてやってきたという、二人の子供連れの寡男にインタビューを続ける。やがて、移民たちは正午になると政府の役人の視察と医師の検査のために、甲板に集まる。それも整然と行われる：“By what successful means, a special aptitude for organization had been infused into these people, I am, of course, unable to report. But I know that, even now, there was no disorder, hurry, or difficulty” (Dickens, 256). 一般に偏見を持たれやすく、何かと好奇の対象になりやすかったモルモン教徒たちが、かくも整然と行動し、規律を守っていることに対して、ディケンズは賞賛する。そして、こう記事を締めくくる。

What is in store for the poor people on the shores of the Great Salt Lake, what happy delusions they are laboring under now, on what miserable blindness their eyes may be opened then, I do not pretend to say. But I went on board their ship to bear testimony against them if they deserve it, as I fully believed they would; to my great astonishment, they did not deserve it; and my predispositions and tendencies must not affect me as an honest witness.

(Dickens, 259–260)

ディケンズ自身、かつて偏見とは無縁でなかった事を仄めかしており、遠回しながら微妙な言い回しをしている。関心の的になったモルモン教徒たちの多重婚 (polygamy) に関しては、遠慮がちな言いようで、判断を避けているように思われる。30代から40代の裁縫師らしき女性を見てディケ

ンズは言う：“That they had any distinct notions of a plurality of husbands or wives, I do not believe. To suppose the family groups of whom the majority of emigrants were composed, polygamically possessed, would be to suppose an absurdity, manifest to anyone who saw the fathers and mothers” (Dickens, 258). ディケンズのルポは、モルモン教徒らが曝されていた偏見、好奇心から解放することを目的としたせいなのか、モルモン教徒の規律、勤勉さを強調するあまり、多重婚の問題には及び腰の印象すら受ける。当時、イギリスではモルモン教徒に対する興味が根強く存在したのか、これ以外にも、次の四編のルポが雑誌には掲載されている。題と号数を挙げておく。“Among the Mormons” (1863.11.7), “Brother Bertrand, Mormon Missionary” (1863. 3. 14), “New America” (1867. 3.9), “Great Salt Lake” (1861.8.24) の四編だが、ディケンズの編集方針なので、記事の内容は抑制されたものである。教養と意思が窺える振舞を高く評価する反面、モルモン教徒の教義には沈黙を守っている。従って、ディケンズ本人のルポが、幾分、遠回して遠慮がちであるように、モルモン教団のイメージは必ずしも堅固なものではなく、不安定なものである。次章では『習作』において、教団のイメージの変わりようを検討する予定である。

3 反転するイメージ

教団の印象は、物語の進展に伴い陰影を増していく。発端はブリンガム・ヤングがフェリアの許を不意に訪れ、ルーシーにスタンガソンかドレッバーの息子と結婚さすように迫ったからである(90)。更にヤングはジョン・スミスの“the thirteenth rule in the code”(90)を楯にフェリアにも所帯を持つように迫る。ルーシーは既にジェファソン・ホープと婚約しており、また彼女を決してモルモン教徒とは結婚させまいと、心に誓っていた(88)。フェリアにとり、モルモンの多重婚は屈辱以外の何者でもなかった：“Such a marriage he regarded as no marriage at all, but as a shame and a disgrace”(88)。そんな時、教団について不穏な噂を耳にする。

Strange rumours began to be bandied about—rumours of murdered immigrants and rifled camps in regions where Indians had never been seen. Fresh women appeared in the harems of the Elders—women who pined and

wept, and bore upon their faces the traces of an unextinguishable horror. Belated wanderers upon the mountains spoke of gangs of armed men, masked, stealthy, and noiseless, who flitted by them in the darkness.... To this day, in the lonely ranches of the West, the name of the Danite Band, or the Avenging Angels, is a sinister and an ill-omened one. (89)

教団の噂は、当初、信仰に背いた者が厳罰を受けるといった、教義に関わることだった。しかし、女性の数が足りなくなると、周辺の地域を襲い、女性を拉致してくるという風評が立ち始める。宗教の名の下に、いかなる暴力も正当化され、秘匿される：“The names of the participators in the deed of blood and violence done under the name of religion were kept profoundly secret” (89). ここで批判の対象となるのは、性的放縦を容認するかのような多重婚の教義とそれを支える一夫多妻の制度。そして、陰湿な閉鎖性である。この閉鎖性は、あらゆる暴力の温床ともなり、人々に恐怖心を植え付けた。

まず多重婚については、フェリアが厳しく非難している通り、それが性的な放縦の象徴とみなされていることは明白である。フェリアの許にやってきたスタンガソンとドレッパーの息子は、各々、自分たちの財産でどれだけの妻子を養っているか、その経済力を誇示する。スタンガソンは4人、ドレッパーは7人の妻がいると自慢しあう(93-4)。フェリアは多重婚を屈辱以外の何者でもないと見ているが、これはドイルも同じであろう(Laughlin,32)。多重婚を経済的な要請から正当化する理由が、モルモン教徒の側にあったにせよ、ドイル本人は否定的だったと思われる。従って、テキストでは多重婚を肯定するモルモン教徒は、旧世界のロンドンでも好色で、酒乱として描かれている。ドレッパーらが宿泊した宿の女主人、マダム・シャルペンティエール(Madame Charpentier)は、ドレッパーが女中になれなれしく振舞ったかと思うと、娘アリスを抱きしめ、誘惑しようとしたという：“Worst of all, he speedily assumed the same attitude towards my daughter Alice,... On one occasion, he actually seized her in his arms and embraced her—...” (55). 一騒動になったことは、後にジェファソン・ホープにより証言されている(116)。つまり、ヴィクトリア朝のロンドンでは、ドレッパーは多重婚を容認し、紛擾を持ち込む不穏分子と映ったのだ。『エコー』紙(Echo)がテキストの終わりで、“not to carry them (their feuds) on

to British soil” (126) と警告を発したのは、まさにその通りである。

しかし、性的な放縦はあくまでドレッパー個人にも帰せられる余地もあり、事実、この頃のドレッパーは教団が分裂し、放逐を余儀なくされた身分である。しかし、組織としての教団はその不透明性ゆえに、より陰湿で、危険なものとして認識されている：“Its invisibility, and the mystery which was attached to it, made this organization doubly terrible” (88). その凶暴性はいかなる秘密結社、ドイツの聖フェーメ団、イタリアの炭焼党にも優る、陰湿な暴力を秘めたものと記される。

Not the Inquisition of Seville, nor the German Vehmegericht, nor the Secret Societies of Italy, were ever able to put a more formidable machinery in motion than that which cast a cloud over the State of Utah. (88)

事実、ルーシーの縁談を断ると、フェリア親子の周辺は俄かに不穏な雰囲気になり、“unseen enemies” (96) という目に見えぬ敵に、始終監視される羽目になる。30日以内に結婚を承諾するという刻限が設けられる。“shadowy terrors, which hung over him” (95) とフェリア親子は不安感に押しつぶされそうな、緊張した日々が続く。天井には、いつの間にか28と書きなぐられていたかと思うと、翌朝にはドアの外側に27と書かれていた。こうして刻限は一刻と迫り、フェリア親子は周囲から監視され、行動の自由を奪われていることを知る。その間の緊張感是这样記されている：“With all his vigilance John Ferrier could not discover whence these daily warnings proceeded. A horror which was almost superstitious came upon him at the sight of him” (96). また、次のようにも語られる：“Turn which way he would, there appeared to be no avoiding the blow which hung over him” (96). そして、最終日一日前も“All manner of vague and terrible fancies filled his imagination” (97) とフェリアの心情が語られる。そして、連絡を受けて戻ってきたホープは、家が四方から監視されていることを告げる(98)。強大な監視機関と化し、人々の不安を掻き立て焦燥感をもたらすさまは、もはや宗教団体とは無縁の一個の全体主義機構に他ならない。実際のところ『習作』におけるヤング・ブリングガムの描き方は、『マイカ・クラーク』(Micah Clarke, 1889), 『亡命者』(The Refugees, 1893) 等の歴史小説に見られるブリングガム像とは隔たった、悪役的に誇張されたものである (Owen Dudley Edwards, xiv)。

ところで、この様に統制がとれ、謎めいた組織の表象は、ある20世紀作家の想像力を痛く刺激したようだ。ペンギン版注作者、エド・グリナート (Ed Glinert) が指摘するように、ジョン・フェリアとモルモン教徒の砂漠での出会いが、ジョージ・オーウェル (George Orwell) の『1984年』 (*Nineteen Eighty-Four*, 1949) に創作上の影響を与えたという (Ed Glinert, 142)。『習作』では、次の場面である。

The name of Nauvoo evidently recalled recollections to John Ferrier. ‘I see,’ he said, ‘you are the Mormons.’
‘We are the Mormons,’ answered his companions with one voice.
‘And where are you going?’ (79)

一方のオーウェルの場合、以下の文脈だ。主人公のウィンストン (Winston) はビッグ・ブラザーズ (Big Brothers) の打倒を目指している。ウィンストンとジュリア (Julia) は監視されていることに気づかない。ウィンストンは無政府主義者ゴルトシュタイン (Goldstein) の本を読んでいる最中に、寝入ってしまう。ジュリアも寝てしまう。やがて、目を覚ました二人は窓から思想警察 (Thought Police) の制服を着た男が入ってくるのを目の当たりにする。壁の絵の裏にはスクリーンが仕掛けられてあり、二人の動向が逐一、把握されていた。やがて、二人は逮捕されてしまう。以下は、そのやり取りである。

‘We are the dead,’ he said.
‘We are the dead,’ echoed Julia dutifully.
‘You are the dead,’ said an iron voice behind them.
They sprang apart. Winston’s entrails seemed to have turned into ice. He could see the white all round the irises of Julia’s eyes. Her face had turned a milky yellow. The smear of rouge that was still on each cheekbones stood out sharply, almost as though unconnected with the skin beneath.
‘You are the dead,’ repeated the iron voice.
...
‘The house is surrounded,’ said Winston.
‘The house is surrounded,’ said the voice. (Orwell. 252–3)

オーウェルの『1984年』では、オセアニア (Oceania) 国は明らかに情報が遮断され、隅々まで統制された全体主義国家を髣髴させる。『習作』のモルモン教団は、これほど近代的に整備されているわけではない。しかし、ジュリアが所属する「反セックス連盟」(Anti-Sex League) という秘密組織は、注目に値する。この団体は子供の誕生を人工受胎により大量生産し、男女の性愛を否定し、管理下に置く運動を推進することで、男女の完全なる独身を理想とする集団である。つまり、『1984年』の、この「反セックス連盟」は『習作』のモルモン教団のパロディーと言えないだろうか。同じことは、『恐怖の谷』に登場する、実在するピンカートン・エイジェンシー (Pinkerton's National Detective Agency) とも近いものがある。これらの事例は、モルモン教団のありさまが宗教組織という実体とは裏腹に、その閉鎖性、陰謀性ゆえに後世の作家の創作意欲を刺激し、管理社会・全体主義国家の告発に筆を取らせるほど、迫真に富んでいたと理解すればよいだろう。つまり、『習作』におけるモルモン教団、教徒像は、後世の作家を刺激するほど、その統制力、閉鎖性、秘密めいたところが注視するところとなったのであり、これは同時代の人々にも共通する意識だったと思われる。そして、他方では多重婚という、その性的奔放さゆえに (勿論、これが俗信、偏見であることは言うまでもないが)、厳格さを装わなければならないヴィクトリア朝人には、大いなる脅威と映ったのである。

4 帝国の外から

『習作』の発表から6年後の1893年、フレデリック・ジャクソン・ターナー (Frederick Jackson Turner) はアメリカ・フロンティアの消滅を宣言する (Laughlin, 96)。つまり、西へと膨張を続けてきたアメリカの歴史もここで一応の終止符を打ち、アメリカの帝国主義的な拡張は以降、ハワイ併合、フィリピンなど太平洋に食指を伸ばす。アメリカでの帝国主義が国内から国外へと舞台を移す時、ロンドンもその余波を受けることになる。エドワーズによれば、メイン・リード (Mayne Reid, 1818-83) という作家の『スカルプ・ハンター』(*The Scalp Hunters*, 1852) という書物の中にユタの “that mighty wilderness” (72) と同種の表現を見ることが出来るという (Edwards, xxvi)。このユタの荒地の “that mighty wilderness” と “that great cesspool” (8) と称されたロンドンの光景はここで一致し (Weimer, 222)、

ロンドンの下層が新たなフロンティアとなる。ホームズが“long walks, which appeared to take him into the lowest portions of the city” (15) に時間を費やしているのは、そこが犯罪の新たなフロンティアだからである。“all the loungers and idlers of the Empire” (8) とあるようにワトソンはもとより、ドレッパー、スタンガソンもロンドンのどや街に引き付けられる。

1893年にフロンティアの消滅が宣言されると、新たなフロンティアはロンドンの下層社会に見出される (McLaughlin, 1-26)。ホームズの物語は数多くの植民地帰りの人物が登場する。ヴィクトール・トレヴァー (Victor Trever, “Gloria Scott”), ショルトー少佐 とジョナサン・スモール (Captain Sholto & Jonathan Small, *The Sign of Four*)、ステイプルトン (Stapleton, *The Hound of the Baskervilles*) や “The Boscombe Valley”, “The Crooked Man” も同種の人物を扱っている。これらの人物は何らかの事情で故国を離れ、植民地で財を稼いで戻ってきた人物であることが多い。階級の違いはあれ、多くは白人イギリス人である。ワトソンも財こそ成さなかったが、こうした人物の範疇に入る。これらの人物の象徴的な意味については、後で詳しく言及する。ここでは、こうした植民地帰りの人物とともに、植民地以外の外国人の流入・存在についてみる必要がある。『習作』では外国人はかなり冷淡に扱われている。ドレッパー、スタンガソンのアメリカ人はむしろの事、犯人と勘違いされるシャルペンティエール (Charpentier) もフランス系の名前だ (55)。とりわけ外国人の中でも、大きな存在を意識させるのはドイツ人である。ドレッパー殺人の現場では、壁に “Rache” と書かれたのを、レイチェルと言う女性名の書き損じだとレストレード (Lestrade) は推理する (33)。血文字は “Rache” というドイツ語の女性名詞で「復讐」を意味すると、ホームズはあっさりと訂正する。既に引用したように、ジェファソン・ホープがこれを思いついた経緯として、ニュー・ヨークで “Rache” の血文字で殴り書きした事件があった事を回想している (119)。これが実際に起こった事件なのかは不明だが、“the secret societies must have done it” (119) と秘密結社陰謀説を書き立てている。

ところで、これが流布した背景には、1880年代のロンドンが相次ぐテロリズムに見舞われたという経緯がある。一見、堅固に見えるヴィクトリア朝の社会が絶えず革命とテロへの不安に怯えていたことはホートンも指摘している (Houghton, 54-58)。とりわけ、極度の緊張が齎されたのが1880年代である。時系列で見ると1883年3月には警視庁捜査課組織の爆

破事件がおき、同年の11月には2つの地下鉄の駅に爆破物が仕掛けられ、『タイムズ』紙(*The Times*)の事務所もその対象となる。1884年の2月にはヴィクトリア駅が爆破され、5月にも市内でテロが起きる。1886年の2月にはブラック・マンディーという大規模な労働者のデモが発生する。こうしたテロリズムは共産主義、労働運動、アイルランド独立運動によるものが多く、外国勢力と結び付けられて考えられることは、余りなかったように思われる。しかし、テロによるこうした騒擾も、ホームズ物の中ではドイツ(帝国)との結びつきが示唆される。ライヘンバッハの滝に落ちたと思われたホームズが、復活後、最初に遭遇したのがモリアーティー派の残党である。“The Empty House”の事件では、殺人犯としてモラン大佐(Colonel Moran)を取り押さえる。モランはモリアーティーの残党であり、彼はフォン・ヘルダー(Von Herder)というドイツ軍人の作った空気銃で、殺人を行ったことが語られる。モランが使用したフォン・ヘルダーの銃で、モリアーティーの一派もドイツに結び付けて考えられる。テロの温床となる秘密組織は、こうしてドイツのイメージでどす黒く、塗りつぶされてしまう。それにしても、なぜドイツ(帝国)なのか。ちなみにテキストでは一人のドイツ人も登場しない。このあたりの事情を、当時の時代背景に探るのが以下の章である。まず、ドイツ統一がもたらした余波、それがどのように語られたか、当時の大衆小説の出版状況を覗いてみよう。

5 全てをドイツに! : ヴィクトリア朝の Germanophobia

1871年のドイツ第二帝国の成立は、ヨーロッパ大陸の最強国としてのドイツの存在をあらためてイギリスの意識に刻み付けた。ドイツ・ショックは出版界として例外ではない。多くの三文小説がドイツ・リスクを語り始める。71年にはサー・ジョージ・チェスニー(Sir George Chesney)の『ドーキングの戦い』(*The Battle of Dorking*)という、今日では問題にされないが、ドイツの侵略を扱った「侵略小説」(invasion novel)がベスト・セラーとなる。時代が下るとこのジャンルは、ウェルズ(H. G. Wells)の『宇宙戦争』(*The War of the World*, 1898)を含み、異界との衝突というテーマを提示する。いずれにせよ、『ドーキングの戦い』からシール(M. P. Shiel)の『黄色い波』(*The Yellow Wave*, 1905)まで、19世紀後半は「異界の侵略」をテーマにした小説が連綿と書かれた時期である(Keating, 358-60)。後

者はタイトルからして日本の侵略が描かれたと思われるが、「侵略小説」の主役はなんと言ってもドイツ（人・帝国）である。

1897年にはブラム・ストーカーの『ドラキュラ』(*Dracula*) が執筆されている。主人公のジョナサン・ハーカー (Jonathan Harker) がドイツのミュンヘンを後にして、カルパティア山脈の許へ旅立つところから、物語は始まる。中欧に舞台をひとまず設定することで、読者にドイツからの侵略を意識さす。その最も顕著な例はキーティングも指摘するようにデュ・モーリア (George Du Maurie) の『トリルビー』(*Trilby*, 1894) である (Keating, 359)。舞台はパリで、三人のイギリス人芸術家とモデルのトリルビー、そして彼女を支配するユダヤ人音楽家スヴェンガリ (Svengali) が登場する。この音楽家はドイツ語なまりの英語を話し、歌手のトリルビーに催眠術を掛け、その魔術で音痴であるトリルビーに美声を与え、歌手としての成功を約束し、彼女（の「声」）を支配する。東欧出身という事はドラキュラと共通点があり、実際これらのドラキュラ、スヴェンガリが支配するのはイギリス人男性ではなく、女性である。つまり、『ドラキュラ』、『トリルビー』も女性を巡って男性が争うという、背後に異性愛制度のイデオロギーが感じられ、同じことはルーシ・フェリアを巡ってスタンガソン、ドレPPERとホープが争うのと同じである。ルーシーを争奪する物語の背後には、こうした異性愛のセクシュアリティを巡る連想が存在する。しかも、『ドラキュラ』などの場合、イギリス人女性を襲う外国人男性（ドイツ人）という、イギリスとドイツの政治闘争にまで重ね合せて考えることもできるのだ。そして、この異性愛の闘争を巡って試されるのが、男性性の問題である。

ショウオルター (Schowalter) は、『習作』が執筆されていた1887年の性愛を巡るイデオロギー的な状況に関して、男性が自らのアイデンティティの拠り所としていた男性性 (manhood) が、その見直しと再構築を迫られていた、不安定な時代であったという。ドイルやステューヴンソンなどの世紀末の男性（作家）が直面した、“masculinity”, “manhood” の危機を以下のように説明している：

It is important to keep in mind that masculinity is no more natural, transparent, and unproblematic than “femininity.” It, too, is a socially constructed role, defined within particular cultural and historical

circumstances, and the *fin de siècle* also marked a crisis of identity for men. The nineteenth century had cherished a belief in the separate spheres of femininity and masculinity that amounted almost to religious faith.

(Schowalter, 8)

「男性性」(masculinity)とは曖昧な言葉だが、アーノルド的な道徳的な真摯さ、生真面目さから、筋力、力への崇拜というパラダイムの変化がヴィクトリア朝に起こったと考えられるが、それは結局、帝国をいかに管理し、円滑に運営していくのかという帝国主義的な「白人の責務」という問題に逢着する。それを脅すのが、まず国内ではフェミニズムなどの女権拡張運動の進展、アフガン戦争(ワトソンはアフガン帰還兵である)やインド大乱などの植民地でのナショナリズムの高まりによる植民地の反乱、そして新興国ドイツ帝国、アメリカの台頭であり、それによりイギリスの帝国が政治的、軍事的、経済的優位を脅かされるという状況が生じたのである。こう見ると反独主義はかなり、多様なイメージを伴っていることが分かる。単にヨーロッパの突出した最強帝国の出現というのみならず、テロリズムと結びつき、政治的に転覆を促し、更にはスヴェンガリ的なイメージで女性をも誘惑するという性的な連想まで伴ってイギリス社会＝帝国の存立をも脅かす「不気味なもの」として位置付けられるのである。言うまでもなく、これは帝国のヘゲモニーを支えていた男性性をも脅かすものだった。それを脅かすドイツ的なものが秘密結社、政治結社という得体の知れない物となって認識されたのである。事態は政治のみならず、経済も同じである。

次に挙げる一節は『バスカヴィルの犬』(*The Hound of the Baskervilles*, 1901)である。四章でホームズとワトソンが依頼人のサー・ヘンリー・バスカヴィル(Sir Henry Baskervilles)、モーティマー博士(Dr. Mortimer)とロンドンのホテルで落ち合う箇所である。サー・ヘンリーは今朝届いたという、警告状を持って現れる。ホームズは『タイムズ』の社説を読んでもらう。

“Capital article this on free trade. Permit me to give you an extract from it. ‘You may be cajoled into imagining that your own special trade or your own industry will be encouraged by a protective tariff, but it stands to reason that

such legislation must in the long run keep away wealth from the country, diminish the value of our imports, and lower the general conditions of life in this island.’

“What do you think of that, Watson?” cried Holmes in high glee, rubbing his hands together with satisfaction. (*The Hound of the Baskervilles*, 80–1)

ホームズの意図は、サー・ヘンリーが受け取った手紙が、新聞の社説を利用してつくられたことを示すことだった。ここで、注意すべきは記事内容である。自国産業は保護関税により成長するかもしれない。しかし、長期的な視野で見れば、国から富を遠ざけ、生活の劣化を招くだろう、という保護貿易に対する反対であり、自由貿易の主張である。事件は1884年以降なので、自由貿易を主張するのは時期的にいささかそぐわぬように思われる。しかし、1840年代のチャーティスト運動にマンチェスター学派のコブデンらが主張したのとは事情が異なる。1846年に穀物法が撤廃され、49年に航海法が廃止されると、経済的自由主義の維持が帝国ヘゲモニーの前提となるからだ。90年代の自由貿易論争は異なる。政治的統一を果たしたドイツとにわか景気に沸くアメリカ（いわゆる「金メッキ時代」）が、自国製品に保護関税をかけたのが発端で、帝国は貿易収支が赤字になり、その補填を植民地との貿易で賄うという事情になる。ポンドが世界経済として通用するための「多角的決済機構」を維持する必要がある、赤字にもかかわらず経済の自由主義を唱えざる得ない、という「自由貿易の逆説」という状況があった（秋田、135–137）。つまり、ここでも背後にあるのがフロンティアを征服したアメリカと、統一後進捗著しいビスマルクのドイツ帝国であり、この2強国により英帝国は経済的にも埋没を余儀なくされつつあったのだ。

以上、今までモルモン教団、秘密結社について述べてきた。それらが象徴するものは、性的放縦、全体主義的な閉鎖主義、帝国主義の優位を覆そうとする外部勢力を反映させたものである事などを指摘した。前者は20世紀初頭の文学で大きなテーマとなるディストピア的な統制社会を示し、後者は、これまた21世紀の今日に大きな問題となっているテロリズムを表しているものと思われる。更にこれらの問題を男性性の観点から考えてみるとどうなるだろうか。モルモン教団のプロットでは、ルーシーという女性を巡るホープ、ドレPPER、スタンガソンの異性愛制度のイデオロギー

を背景とした男性性を誇示する物語だ。但し、三人とも宗教家というより開拓農民、農場経営者（イギリス文学では *Squire*）と言ったほうが相応しく、肉体的な、反知性主義的な男性性である。一方のロンドンの秘密結社の存在は大陸の影響が色濃く、とりわけドイツを専ら連想させる。ドラキュラ、スヴェンガリのようにイギリス人女性を誘惑して、破滅に導こうとするイメージで、大英帝国のヘゲモニーを脅かし、帝国の男性性の危機を象徴するのである。そのような状況で、ホームズとワトソンはどのように対処するのだろうか。次章では『習作』をワトソンの物語という視点から、ホームズはどう語られ、新たな男性性がどのように構築されていくかを述べるつもりだ。ここで問題となるのは、ワトソンとホームズのつながりが何を表し（ドイルはその関係に何を反映させ）、どうしてドイルはこの関係を描こうとしたのか。最後はドイルの“national identity”についても触れる予定だ。

6 ワトソン、驚く：ワトソンのアイデンティティ形成

1878年にロンドン大学医学部で学位を取得したワトソンは、第二次アフガン戦争に従軍する。しかし、メイワント（Maiwand）の戦いで、肩を負傷すると(7)、治療を余儀なくされる。入院先の病院でチフスにかかったワトソンは、“as free as an income of eleven shillings and sixpence a day will permit a man to be” (8) とあるように一日、11シリングと6ペンスの年金を得て除隊する。負傷兵としてワトソンは大英帝国のロンドンに戻ってきたのだ。『習作』は二部に分かれ、一部はワトソンの一人称体で書かれ、二部も最後の二章はワトソンの手になる。最後の二章がワトソンの手になるのはワトソンがホームズから事件の解決の手立てを聞くからだ。このテキストは、いわばワトソンの“recuperation”（回復）の物語である。負傷したワトソンがホームズという謎めいた人物に会う事で、相手に次第に魅せられ、ホームズの伝記作者としての使命を自覚し、人生に前向きになり自信を回復する：“Never mind, ... I have all the facts in my journal, and the public shall know them....” (127). まず、その過程を追っていこう。

同居して数週間するうちに、“my interest in him and my curiosity as to his aims in life gradually deepened and increased” (16) とホームズへの関心がまし、観相学的に彼の身体的特徴を細かく記す。ホームズの知識の豊富さと

膨大さに、全く持って圧倒されてしまう。

The reader may set me down as a hopeless busybody, when I confess how much this man *stimulated my curiosity*, and how often I endeavoured to break through the reticence which he showed on all that concerned himself.... Neither did he appear to have pursued any course of reading which might fit him for a degree in science or any other recognized portal... Yet his zeal for certain studies was so extraordinary ample and minute that his observations have fairly *astounded me*. (Italics mine) (16)

ワトソンはホームズに「好奇心を刺激され」、そして、彼の知識量に「圧倒」されてしまう。ところが、知識の片よりも甚だしく、太陽系が知らないと聞き、驚きも頂点に達してしまう：“My surprise reached a climax, however, when I found incidentally that he was ignorant of ... the composition of the Solar System” (17). そして、ホームズの知識を、ワトソンは一覧表にする (18)。ホームズが知識の用い方について書いた “The Book of Life” という論文をたわごとだと言い捨てた、ワトソンは作者がホームズと知り、“You!” と驚いてしまう (21)。ワトソンが、一笑に附した理論で食いつないでいると聞くと、ワトソンはまたも驚いてしまう：“‘And how!’ I asked involuntarily” (21). ワトソンの驚きはまだ続く。部屋に手紙を持ってきた若者が、かつて海兵隊に所属していたことを、言い当てたからだ (24)。それでも、ワトソンの中には “some lurking suspicion” (25) があったものの、それもローリストン・ガーデンの実況検分のあと、ホームズから殺人の状況、犯人の特徴について、理路整然と聞かされると、ワトソンも “you have brought detection as near an exact science as it ever will be brought in this world” (38) と感嘆する。事件が解決し、功績が無能なレストレイドとグレッグソンに帰されると、ホームズの功績を人々に知らしめようとワトソンは決意して、テキストは幕を閉じる：“I have all the facts in my journal, and the public shall know them. In the meantime you must make yourself contented by the consciousness of success, ...” (127). ワトソンはこうしてホームズを前にして “Wonderful !” (26)、“You amaze me, Holmes” (36) と、驚いてばかりいるのだ。こうして、ホームズとの出会いにより好奇心、知性を刺激されたワトソンは、アフガン戦争で受けた傷から何とか回復 (“recuperate”) し、ホームズの「公式」伝

記作者としてそのアイデンティティを確立する。繰り返すが、このテキストはワトソンの“recuperation”の物語である。

それでは、ホームズの何が一体、ワトソンをそんなに驚かしたのか。言うまでもなく、それは犯罪全般にわたるホームズの膨大な知識と、それをデータベース化する、鋭い論理力である。最終章でホームズはなぜ解決可能になったか、自らの方法論の原理を語る。

‘...In solving a problem of this sort, the grand thing is to be able to reason backwards.... In the every-day affairs of life it is more useful to reason forwards, and so the other comes to be neglected. There are fifty who can reason synthetically for one who can reason analytically.’ (123)

ホームズは自らの推理法を“reason backwards”、つまり「巻き戻し推理法」と称するが、これはある現象（事件）があるとすれば、それを生じさせた原因が、たとえ無関係に見えても、想像力を駆使して仮説を立てていく方法だと説明する。その逆がレストレードらの“reason forward”という原因をろくに省みない、「前倒し推理法」である。ワトソンが魅せられたのはこうした知的な合理主義的精神である。スタムフォード (Stamford) がホームズのことを“a little too scientific to my taste”とか“He appears to have a passion for definite and exact knowledge” (10) と述べている通りである。ワトソンとホームズの最初の出会いが“the chemical laboratory” (11) である。そこは“a lofty chamber, lined and littered with countless bottles” (11) と言い表されている。実験室の出会い（しかも、男だけの）は、スティーヴンスン (R. L. Stevenson) の『ジキル博士とハイド氏』(*Dr. Jekyll and Mr. Hyde*, 1886), 『タイム・マシン』(*The Time Machine*, 1895) でも見られる。世紀末文学では男たちは実験室で出会う。少なくとも『習作』では、男性性と合理主義精神は、実験室を介在に結びつく。

しかし、ホームズは知性一辺倒が思わすひ弱さと無縁であることも、その容姿から窺える。観相学的に眼は“sharp and piercing”であり、表情全般と“hawk-like nose”には“an air of alertness and decision” (16) があり、ひ弱な印象はない。それどころか、捕らえられ暴れまわるホープに果敢に飛び掛る：“... and Holmes sprang upon him like so many staghounds” (67). また、別の箇所では猟犬だといっではばからない (40)。ホームズが持つある種の

果敢さは、このテキスト以外では日本のバリツという武術を用いてモリアーティを倒したこと (“The Empty House”), またウッドリー (Woodley) という悪漢をボクシングで殴り倒したこと (“The Solitary Cyclist”) で、その身体能力の高さが窺い知れる。『習作』においてはホームズの闘争本能とその身体能力の高さは、ホープとの比較、類似によって示されていることはケストナーも指摘する通りである (Kestner, 55)。ホームズの男性性は知性と身体能力の高さを備えた、新しい意味合いを帯びている。

しかし、ホームズとホープの男性性は一方では、大きな隔たりがある。ホープとドレPPER、スタンガソンらとルーシーを巡る争いは、男性は戦いの末、女性を獲得するという異性愛の原理が背後にあることを指摘した。更にこうした女性を巡る争いが、ややもすれば野卑な、下卑た情欲が瀰漫した気分が横溢し、ホームズの知性主義とは大きく隔たっているからだ。それは何よりもホームズが女性に関して、関心がないからである。ホームズの女嫌い (misogyny) は、連載を重ねるたびにはっきりして来る。“The Greek Interpreter” では実の兄を見捨てた女性に手厳しい。そして、『四人の署名』 (*The Sign of Four*, 1890) の依頼人メアリー・モーンスタン (Mary Morstan) にワトソンが興味を示しても、ホームズはまるっきり関心がない。ホームズは歴然たる女性嫌悪主義者 (misogynist) なのだ。ホームズとホープは秩序、正義を愛する点では似通っていても、知性主義、女嫌いという点では大きく隔たっている。

7 ホモ・ソーシャルで同志的結社のホームズとワトソン

そうなるとホームズとワトソンのこの結びつきがホモ・ソーシャルで同志的な、男の絆とわかるだろう。軍隊という男性同士の連隊から除外されたワトソンは、ロンドンに戻りホームズと出会う。ホームズとの同居生活で、ワトソンは軍隊にも見られる同志的な紐帯 (comradeship) を取り戻す。むろん、軍隊的な規律等は無縁である。ベイカー街211番 (Baker Street) に出入りするの、今のところ殆ど男性である (19)。『習作』では、まだ家政婦のハドソン夫人 (Mrs. Hudson) は見えない。ベイカー街211番地はホームズとワトソンのホモ・ソーシャルな共同体、結社なのである。その意味では、この同志的なクラブ・ランドは、モルモン教団や政治的な地下組織に次ぐ存在を占める。ワトソンの男性性の回復は、ホームズの「公式」

伝記作者の地位を得、そしてホームズとベイカー街211番地というクラブ・ランドを形成して、初めて完成するのである。

ここで今まで言及してきた、組織について、再度まとめなおしてみよう。モルモン教団とスタンガソン、ドレッパーが象徴するものは、性的紊乱であり、ヴィクトリア朝の厳格な性モラルが排除しがっている、悪しき慣習を意味する。それは、異性愛イデオロギーが絡んだ反知性主義であり、ヤング・ブリンガム、ドレッパー等に宗教家としての敬虔な側面を見るのは無理だろう。もう一方の政治結社の活動は、ドイツ的なものを連想させ、大英帝国の標榜する自由貿易体制に挑戦し、軍事的ヘゲモニーすら脅かす。『習作』の『緋色』(scarlet)が象徴するものに1886年のデモ隊の一派が掲げていた、‘red-flag’を連想させるとの指摘もある(Kestner, 40)。1880年代に頻発したテロリズムと1871年に成立したドイツ第二帝国が、イギリス帝国のヘゲモニーを揺るがす暴力主義と考えられていたのである。これら二つの勢力がアメリカとドイツという外国勢力により象徴されているのは示唆的である。

ところで、ユナ・シジック(Yuna Siddiqi)は、ホームズ物語に数多くみられる気味の悪い人物、体に相当な傷を負った植民地帰りの人物の存在を挙げ、彼らが本国イギリス人のある種の不安を代弁していると、主張している。フロイトを援用しながら、こうした「不気味なもの」(unheimlich)とは、全く身に覚えのないものではなく、実はかつて親しんでいたものが疎遠になり、距離感が出てきたために親近感が失せ、不気味なものに転落したという。これが具体的に結実したのが、ゴシック小説などでよくみられる「分身」である。つまり、ホームズ物語でいえば植民地から帰ってきた人間は、たとえ白人イギリス人であろうとも、親近感とは無縁の「不気味な」存在なのだ。それが今や人と人という個人的な次元においてではなく、国との関係において捉えられたのが『習作』における、結社の意味なのである。シジックはこう述べている。

The doubling and return of colonials—some abject, some not—is, then, a trope that expresses a number of underlying cultural anxieties.... It suggests also that an episode or experience that has been repressed come back to trouble the present. The return of the disfigured and violent colonials points to a historical trauma that has been repressed—it signifies a return of the

violence that is suppressed in celebratory accounts of the civilizing mission.
(Siddiqi, 242)

つまり、体の傷は抑圧的な過去の再現と復帰であり、文明化の名のもとに正当化された暴力行為とその傷痕の再現なのである。イギリスにおける教団、結社の暗躍は、過去の心的トラウマの顕現に他ならない。それを癒すのがホームズとワトソンのベイカー街221番地というクラブ・ランドに他ならない。ホームズはそれを象徴する新しいヒーロー像なのである (Kestner, 36)。このクラブ・ランドは、帝国の新たな砦として多くの読者の支持を仰いだのである。

こうして、新結社ベイカー街221番地は、帝国の病、トラウマを治癒するために読者に必要とされたわけだが、ドイル自身も、あれだけホームズを嫌っていたにもかかわらず、それを必要としたのである。次章ではそのドイルが必要とした理由を、ドイル自身の自伝的な要因に探ってみるつもりである。つまり、ドイルのナショナリティの問題である。

8 消されたアイリッシュネス

『習作』の二部はユタ州のアルカリ土壌の大平原 (the Great Alkali Plain) を行くフェリアと後に養女になる5歳の女の子の逃避行で幕が開ける。この時の日付が、1847年3月4日とわざわざ記されていることに注意すべきだろう。エド・グリナートによればこの日付は“Chosen by Conan Doyle, presumably, as this was the year of the Irish famine” (141) と、その選択に当たりドイルの意図が介在していたことを主張している。つまり、フェリアとその娘は、1847年のアイルランド飢饉を逃れた、アイルランド系の移民と示唆されているが、それにも拘わらずモルモン教団の一味に加わったフェリア親子は“Anglo-Saxon tenacity” (81) で、荒地を開墾して、都市を建設していく。フェリアの働きは目覚ましく、粘り強く土地を開墾しモルモン教徒と同じく財を成す。ここまで来ると、アングロ・サクソン民族の不屈の精神が強調され、アイリッシュである事は消去されてしまう。これは一体、なぜだろうか。ドイルの家系を見てみよう。

ドイルは1859年、エディンバラで生まれた。ドイルとなにかと引き合いに出されるスティーヴンソンは、9年前の1850年に同じエディンバラ

で生まれているので、ドイルの家系もスコットランドと思いがちである。しかし、ドイルの家族はリチャード一世の部下にまで遡る、ローマ・カトリックを信奉するアイルランド出身の旧家である。エドワード三世により、アイルランドのカウンティ・ウェクスフォード (County Wexford) に土地を与えられ、アイルランド貴族として地位を保つが、それ以降は土地を剥奪されたり、迫害されたりと苦難にあったという (McLaguhlin, 46)。ドイル家が家名を再興するのは、リチャード・ドイル (Richard Doyle) によってである。1840年に『パンチ』紙の挿絵画家として盛名をはせたリチャードは、ディッケンズの友人でもあった。しかし、『パンチ』紙が反カトリック的傾向を強めると、リチャードは雑誌の編集を辞職する。ドイルの父チャールズもアイルランド系・カトリック教徒と結婚する。しかし、父に生活力がなかったためにドイルはやむなく叔父のリチャードに援助を乞うことになる。ドイルの父のチャールズの生活力のなさには『四人の署名』で、ワトソンの兄を推理して言うように、“he had occasional bursts of prosperity, or he could not have redeemed the pledge” (*The Sign of Four*, 56) と自伝的な事情が窺える。ドイルはやがて、改宗するが、当然、一家に波紋を招く。その間の知的な事情は、こう説明されている。

Many factors contributed to Conan Doyle's loss of faith—his unhappy religious schooling, his scientific training and turn of mind, and a careful reading of Darwin and his followers. At the University of Edinburgh, he joined in the general admiration of “Darwin's Bulldog,” Professor Thomas Huxley, who coined the term “agnosticism” only a few years earlier.

(Stashower, 50)

当然、伯父はもとより、家族とも疎遠になる。

ここまで来れば、フェリアがアイルランド系を示唆されながら、結局はアングロ・サクソンの属性へと回収されていく理由に、ドイルの家族との確執があったと納得できる。カトリック棄教とプロテスタントへの帰依は、ドイルの歴史小説、『マイカ・クラーク』、『亡命者』でも、カトリックとプロテスタントの対立、それに引き裂かれたドイルのアイデンティティの有り様という形で現れる。後者はドイルの最後の歴史小説で、それ以降、ドイルは筋金入りの帝国主義者として、内外に名を馳せる。1900年に南

アフリカでボーア戦争が始まると、志願従軍医師として、兵士の治療・看病に当たる。後に帝国の軍事行動を正当化するために『ボーア戦争』(*The Great Boer War*, 1900) というパンフレットを執筆して、帝国への支持と忠誠を公表している。その功績が認められて、1902年にナイトの称号を受けている。元来、保守的な思想の持ち主だったので、アイルランドとイングランド、カトリックとプロテスタントに引き裂かれた心情も、こうして熱烈な帝国主義、アングロ・サクソン中心主義へと傾斜していく。当然のことながら、ドイルは自らアイリッシュである出自を徹頭徹尾、排除し、アングロ・サクソン中心の帝国主義者へと重ね合わせていく。その理想が、男同士の麗しい同志愛と知性とスポーツ精神に富んだホモ・ソーシャルな結社であり、ホームズとワトソンのベイカー街221番地である。これは、自らのアイリッシュネスと父性をも否定したドイルのエディプスの葛藤から生じたのである。

しかし、こうした男性性を維持しようとする努力が、絶えず緊張と危機に見舞われていることは容易に察することが出来る。ワトソンの傷の場所が一定せず、『習作』では肩であるが、『恐怖の谷』では足になっているが、これはワトソンの回復の難しさを示したものと言えよう (Kestner, 46-50)。ここでは、ドイルが晩年に心霊主義に転じ、周囲を当惑させた事実を思い出せばよいかもしれない。1918年に長男を亡くすと、『新しい啓示』(*The New Revelation*, 1918) を出し、心霊主義のために論陣を張り世界を旅する。その様子を新興芸術派の阿部知二が『アフリカのドイル』(1931) という掌編で語っている。²⁾かつて、従軍医師として訪れたドイルは、心霊主義普及の伝道師として再び南アフリカの地を訪れる。セシル・ローズの墓でドイルが死者との降霊会を開いた様を、息子のデイヴィドとモオリスが回想する場面である。デイヴィドは後者に向かって言う。

「君は少しジョハネスバアグ風になりすぎたようだが、それはあの技師の影響かね。懷疑しすぎるね。たとえば、あのセシル・ロオズの墓で父さんが彼の靈魂と交話しようとして、母さんを霊媒に立たせて、母さんの手がふるえてきてセシル・ロオズの言葉を鉛筆で書いたとき、君はそんなことは信じられない、といふ風に墓の周囲の昆虫を追掛け廻してゐたからね。」

「母さんは父さんへの愛情であんなことをしてゐる、と僕が思つてゐる。」

るとでも思っているのですか。」デイヴィドは険しい眼で弟を見つめた。モオリスの顔は少し蒼ざめてきた。しばらく二人は沈黙しつづけた。

「モオリス。また何を考えているのだい。」

「僕は、いま夜だから、あの南阿の征服者の墓のまはりで、猛獣の吼える声や足音がひびき、石のうへを蛇が這う音がしてゐるだろうとおもてゐたよ。やつぱり僕は風土病にかかつて変になつてゐるようだ。」デイヴィドは、弟の額に掌を当ててみた。そのとに、開いた扉を通じて隣の部屋の妹の声が聞こえてきた。

(中略)

その声は非常に突然な、甲高い、失神から眼醒めたあとの叫びのような響きをもつてゐた。そして、他のものも皆、暗い夢からさめたように、その懐郷の声に聴入った。(阿部知二、299)

これはむろん、知二の創作で、史実そのものではないだろう。しかし、知二が表現していることは、まさしく周囲の戸惑いを代弁したものだ。ドイルのエディプス的な葛藤により実現された合理主義的な精神には、「暗い夢」という不確定要因も孕んでいたのだ。だからこそ、秘密結社などという「不気味なもの」に惹かれたのかも知れないが、しかし、ここから先は多重決定論の世界である。

註

- テキストはペンギン版による。ページ数はその番号である。書誌を参考の事。
- 1) イギリス文学における結社、クラブの存在は、もう少し考慮されてもいいのではないだろうか。ヨーロッパでは結社と言えば、フリー・メイソンなどが思いつぐが、これは宮廷政治などと結びつき、エリート性、貴族性が強い。イギリスでは、その分、社交クラブも多く、市民生活に根差したものと思われる。そのためクラブへの言及は、本文中にも記した通り、かなり頻繁に見られる。ディケンズ以外はチェスタトン (G. K. Chesterton) の『奇商クラブ』(*The Club of Queer Trades*, 1905), 『木曜日だった男』(*The Man who was Thursday*, 1908) があり、これはエドワード朝のクラブ文学である。コンラッド (Joseph Conrad) の『秘密諜報部員』(*The Secret Agent*, 1907), 『西欧の眼下のもとに』(*Under Western Eyes*, 1910) も同時期である。ヴィクトリア朝

ではステイーヴンソンの『新アラビア夜話』(*New Arabian Nights*, 1882)に所収の「自殺倶楽部」(“The Suicide Club”)が有名である。こうした、クラブ、結社の存在は、テロ行為と結びつく。ヴィクトリア朝文学のテロについては、次を参照。Barbara Arnett Melchiori, *Terrorism in the Late Victorian Novel* (London: Croom Helm, 1985)

- 2) 阿部知二のこの作品は昭和6年3月号の『改造』に発表され、後に短編集『微風』に収録されている。その前年にドイルが没しているのも、この作品は事実上、ドイルへのオマージュだったと思われる。

参考文献

- Bates, Christopher G. ed. *The Early Republic and Antebellum America: An Encyclopedia of Social, Political, Cultural, and Economic History* volume 2 New York: Sharpe Reference, 2010
- Dickens, Charles. *‘The Uncommercial Traveller’ and Other Papers 1859–70* ed. by Michael Slater and John Drew, Columbus: Ohio State University, 2000
- Doyle, Arthur Conan. *A Study in Scarlet* introduction by Iain Sinclair. notes by Ed Glinert London: Penguin Books, 2001
- Doyle, Arthur Conan. *The Hound of the Baskervilles with “The Adventure of the Speckled Band”* ed. by Francis O’Gorman, London: broadview edition, 2006
- Doyle, Arthur Conan. *The Sign of Four* ed. by Shafquat Towheed, London: broadview edition, 2010
- Edwards, Owen Dudley. ‘Introduction and Notes’ to *A Study in Scarlet* Oxford: Oxford University Press, 1999
- Glinert, Ed. ‘Notes’ to *A Study in Scarlet* London: Penguin Books, 2001
- Houghton, Walter E. *The Victorian Frame of Mind, 1830–1870* New Haven: Yale University Press, 1985
- Keating, Peter. *The Haunted Study: A Social History of the English Novel 1875–1914* London: Fontana Press, 1991
- Kestner, Joseph A. *Sherlock’s Men: Masculinity, Conan Doyle, and Cultural History* Aldershot: Ashgate, 1997
- McLaughlin, Joseph. *Writing the Urban Jungle: Reading Empire in London from Doyle to Eliot* Charlottesville: University of Virginia, 2000
- Orwell, George. *Nineteen Eighty-Four* Harmondsworth: Penguin Books, 1974.
- Siddiqi, Yumna. “The Cesspool of Empire: Sherlock Holmes and the Return of the Repressed”, *Victorian Literature and Culture* volume 34. 10 (March 2006)
- Showalter, Elaine. *Sexual Anarchy: Gender and Culture at the Fin de Siecle*

Bloomsbury: Virago Books, 1990

Stashower, Daniel. *Teller of Tales: The Life of Arthur Conan Doyle* London: Penguin Books, 1999

Weimer, Christopher B. “A Cervantine Reading of Conan Doyle: Interpolated Narrative in *A Study in Scarlet*” in *Sherlock Holmes: Victorian Sleuth to Modern Hero* eds. by Putney, Cuthall King and Sargarman London: The Scarecrow Press, 1996

秋田 茂、『イギリス帝国の歴史：アジアから考える』（中公新書）東京：中央公論新社、2012

阿部 行蔵、『アメリカ宗教読本』東京：コバルト社、1946

阿部 行蔵、『アメリカ精神の形成』東京：文化書院、1947

阿部 知二、『阿部知二全集 第一巻』東京：河出書房新社、1974